

受動文の接語重複分析再考：古典マレー語の di-受動文*

野元 裕樹（東京外国語大学）

nomoto@tufs.ac.jp

1. はじめに

Baker et al. (1989) は、受動文には接語重複 (clitic doubling) が関与すると提案した。具体的には、-en を by 句により重複される接語相当の要素と分析した。

- (1) V -en ... by DP
接語 重複要素

彼らの分析で注目すべきは、以下の2つの主張である。①受動文動作主は統語的に項として存在する。②その項は、動詞に付加したり、by 句によって重複したりできる。①は、Collins (2005) の受動文の smuggling 分析など、近年の受動文の分析の多くで継承されている。しかし、②は Baker et al. 論文の発表以来、顧みられることはほとんどなかった。それどころか、Collins は逆に、by 句の中の DP を受動文の真の動作主項として分析している。このような状況は、英語の -en や他の言語の相当要素が明らかに接語ではないことや、接語重複の現象が広くは知られていないことが原因だろう。

本稿では、古典マレー語のデータが②を明確な形で体现し、さらに接語重複を伴うことを示す。データは、18～19 世紀のテキスト Hikayat Hang Tuah、Hikayat Abdullah、Hikayat Maharaja Marakarma (Si Miskin) を用いる。例文の出典を示す際には、それぞれ Tuah、Abd、Misk の略を用いる。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第2節で古典マレー語の受動文について、その分類を示す。次に、第3節では、接語重複の存在がよく知られているロマンス諸語の例により、接語重複の現象を説明したのち、古典マレー語のハイブリッド型 di-受動文が同様の特徴を持つことを示す。第4節では、本稿で報告する言語事実の一般言語学上の意義について論じる。なお、本稿では言語事実の部分だけ扱う。事実の背後にあるメカニズムについては、Nomoto (2016) を参照されたい。

2. 古典マレー語の受動文の分類

古典マレー語の受動文には明示的な態標識を伴う di-受動文とそれを伴わない裸受動文がある。本稿では前者を議論する。di-受動文は動作主の標示方法により以下の4つに分類できる。すなわち、①明示的な動作主が生起しない隠在型(2a)、②動作主が前置詞 oleh 「～によって」によって導入される oleh 型(2b)、③動作主が動詞の直後に生起する DP 型(2c)、④動作主が動詞の直後の3人称接語代名詞=nya と oleh 前置詞句の2つによって表されるハイブリッド型(2d)である。ハイブリッド型は、動詞の直後に DP（ここでは3人称代名詞）が生起する DP 型の特徴と前置詞 oleh を用いる oleh 型の特徴の両方を示すという点でハイブリッドである¹。

* 本研究は JSPS 科研費 26770135 の助成を受けたものである。本稿では、Leipzig Glossing Rules にない略号として、PART (= particle) を用いる。

¹ 3人称単数代名詞には、ia、dia、=nya の3つの形があり、受動文動作主では必ず接語形の=nya で生起する。

(2) a. 隠在型 : di-V

Dari mana datang Enci' Nakhoda dan apa *di-cari*?
from where come Mr. Captain and what PASS-look.for

「船長殿はどこからやってこられて、何を探しておられるのですか？」 (Abd: 43)

b. oleh 型 : di-V **oleh DP**

Maka duit itu *di-ambil oleh bapa=nya*
and money that PASS-take by father=3

「そしてその金は彼らの父親達が手にした」 (Abd: 17)

c. DP 型 : di-V **DP**

tiada ia *di-makan hulat*
not it PASS-eat worm

「それ (=知識) は虫に喰われることはない」 (Abd: 23)

d. ハイブリッド型 : di-V=**nya oleh DP**

maka *di-lihat=nya oleh mereka itu* ada se-orang Cina baharu bangun dari tidur.
and PASS-look=3 by 3PL that be one-CLF Chinese just get.up from sleep

「そして、彼らは起きたばかりの華人が一人いるのを目にした。」 (Abd: 296)

oleh 型(3a)でも、ハイブリッド型(3b)でも、oleh 句は受動動詞の後だけでなく、前にも生起する。よって、どちらの場合も oleh 句は付加詞である。

(3) a. Setelah sampai maka **oleh baginda di-bawa masuk** ke dalam mahligai
after arrive then by princess PASS-bring enter to inside palace

「到着すると、王女は城の中に入れた」 (Misk: 28)

b. **oleh ibu bapa=ku di-jemputkan=nya-lah** segala adik kakak dalam Melaka
by parents=my PASS-invite=3-PART all sibling in Malacca

「私の両親はマラッカにいる兄弟姉妹たちを招き寄せた」 (Abd: 32)

ハイブリッド型は、現代マレー語には存在しない。本研究で用いた 19 世紀のテキスト Hikayat Abdullah および Hikayat Marakarma においても、その消失の前兆が見て取れる。Nomoto & Kartini (2016)によれば、ハイブリッド型は 4 つの型の中で最も頻度が低い。最初の受動節 300 例のうちハイブリッド型は、Hikayat Abdulah で 2 例 (0.7%)、Hikayat Marakarma で 13 例 (4.3%) であると報告している。それに対し、18 世紀のテキスト Hikayat Hang Tuah では全文中に 190 例も観察された。

3. ハイブリッド型は接語重複を伴う

3.1. 接語重複

接語重複 (clitic doubling) は、ロマンス諸語、セム諸語、スラブ諸語、バルカン諸語などで広く観察されている。先行研究では、もっぱら(5)のように動詞の内項 (直接目的語、間接目的語) が関与する現象として扱われている。(4)に挙げる、Anagnostopoulou による定義にもこの点が反映され

ており、完全な DP が項であるという指定が含まれている。

(4) 接語重複 (Anagnostopoulou 予定 ; 強調は筆者による)

接語重複とは、接語が項位置にある完全な DP と共起し、非連続的な構成素を成す構文である。

(5) スペイン語リオプラテンセ方言 (Jaeggli 1986: 32)

Lo vimos a Juan.²

him we.saw A Juan

「私達はフアンを見た。」

Baker et al. (1989) が提案した受動文における接語重複は、外項が関与する。それを接語重複の守備範囲に収めるには、(4)の下線部の項に関する指定を外す必要がある。受動文の by 句はそれ自体、項位置にはないとするのが一般的だからである。ロマンス諸語などに見られる内項が関与する接語重複と受動文における外項が関与する接語重複を比較して図示すると、(6)のようになる。

(6) a. 内項の接語重複 (例 : (5))

接語+動詞 目的語 (=重複要素)

b. 外項の接語重複 (例 : (1))

動詞+接語 by 句 (=重複要素)

3.2. ハイブリッド型が持つ接語重複の特徴

古典マレー語のハイブリッド型 di-受動文は、接語=nya が oleh 句により重複されているような、接語重複を伴っていると分析できる。

(7) di-lihat=nya oleh mereka itu (cf. (2d))

PASS-look=3 by 3PL that

動詞+接語 重複要素

「彼らは…を目にした。」

以下、ハイブリッド型がロマンス諸語などの直接目的語の接語重複 (cf. Anagnostopoulou 予定) と少なくとも 4 つの共通の特徴を持つことを示すことにより、この分析を裏付ける。

3.2.1. 随意性

直接目的語の接語重複が許される場合、たいていそれは随意的である。(5)のスペイン語の例から接語 lo を省いた文も文法的である。(6)の構図より、受動文で接語重複が起こらない場合というのは、by 句が生起しない場合になる。これは接語=nya のみが現れる DP 型であり、文法的である。

² Jaeggli は、a を対格を付与する要素と分析している。

- (8) Serta *di-lihat=nya* nakhoda itu, maka kata=*nya*:
 and PASS-look=3 captain that than say=3
 「そして彼は船長を目にすると、次のように言った：」 (Abd: 43)

(8)の接語代名詞=*nya*「彼」は、直前の文の *bapa=ku*「私の父」を受ける。ゆえに、指示的である。

3.2.2. 特別な前置詞

ロマンス諸語で直接目的語重複が可能な言語は、スペイン語の *a* のような特別な前置詞を持つ言語のみであるとされる (Kayne の一般化)。古典マレー語のハイブリッド型 *di*-受動文で重複要素を導入する前置詞 *oleh* は同様の特別な前置詞であるとみなせる。他の前置詞は生起できない。例えば、*dengar*「聞く」から派生された *kedengaran*「耳に入る」や *terdengar*「耳にする」は、(9)のように、経験者項を前置詞 *kepada*「～に」で導入することができる。しかし、受動形の *di-dengar=nya* では経験者項が *kepada* で導入されることはなく、常に *oleh* が用いられる。

- (9) a. Maka *kedengaran-lah* khabar itu *kepada* orang² Cina yang kaya² dan
 and be.heard-PART news that to people Chinese REL rich and
 kapitan Cina
 headman Chinese
 「そしてそのニュースは裕福な華人たちや華人のカピタンの耳に入った。」 (Abd: 320)
- b. Maka setelah *terdengar* khabar itu *kepada* raja, maka ia memberi titah
 and after be.heard news that to king then 3SG give command
 「そして王様はその知らせを耳にすると、勅命をお出しになった」 (Abd: 68)

3.2.3. 高い指示性

直接目的語重複では目的語の指示性が高いことが知られている³。そのあり方には、定のみ (例：ギリシア語)、特定のみ (例：スペイン語リオプラテンセ方言)、定または特定のみ (例：ルーマニア語) など、言語間に変異が見られる (Anagnostopoulou 予定)。

- (10) スペイン語リオプラテンセ方言 (Suñer 1998)
- a. La oían a {Paca/ la niña}. (定、特定)
 her they.listened A Paca the girl
 「彼らは {パカ/女の子} の言うことを聞いた。」
- b. *La alabarán al niño que termine primero. (定、不特定)
 him they.will.praise A+the boy who finish first
 「彼らは最初に終わった男の子を褒める。」

³ Anagnostopoulou (予定) によれば、指示性に加え、有生性の高さも接語重複の可否を左右する。古典マレー語のハイブリッド型 *di*-受動文でも、有生の動作主がほとんどである。しかし、*ghali*「ガレー船」、*peluru*「弾丸」など無生物の動作主も見つかる。

古典マレー語のハイブリッド型 di-受動文でも、動作主は指示性が高いことが分かった。3つのテキストに現れるハイブリッド型の受動動詞をすべて調べると、1例を除き動作主はすべて、定(241例)または特定(3例)であった。(11)は、唯一例外とみなした例である。だが、orang「人」を殺害計画を知られてはまずい特定の人々と解釈すれば、この例も例外ではなくなるかもしれない。

(11) Pada malam itu Patih Gajah Mada pun tiada tidur duduk membicarakan pekerjaan hendak membunuh

Laksamana, kerana pekerjaan=nya itu semuanya di-ketahui=nya oleh orang.

because operation=3 that all PASS-know=3 by person

「海軍大将(=ハントウア)殺害の企てが何もかも人に知られてしまったため、その夜、宰相ガジャマダは一睡もせず、殺害計画について議論した。」(Tuah: 273)

ハイブリッド型の動作主が定や特定であるのに対し、DP型の動作主はほとんどが不定であった(例:(2c))。ただし、これはDP型が指示性の高い動作主を許さないということではない。例えば、上の(8)では、3人称代名詞が生起している。限定詞を伴う句や固有名も可能である。DP型の動作主として可能な要素は、ハイブリッド型の動作主として可能な要素を包含する。3.2.1節で論じた随意性が成り立つのはこのためでもある。

3.2.4. 同一節条件

Anagnostopoulou(予定)は、直接目的語接語重複と目的語一致を区別する特徴として、接語重複は同一節中でなければならないが、一致は長距離で可能であることを挙げている。古典マレー語の場合、古典語であるため、聞き取り調査による文法性の確認はできない。しかし、すべての例で重複要素と分析される oleh 句は接語=nya と同一の節に生起する。

3.3. 接語転移の可能性

ハイブリッド型は、(12)のような接語転移(clitic dislocation)構文とは異なる。接語転移構文では、特別な前置詞は必ずしも必要ない。もしハイブリッド型が接語転移構文であれば、olehなしの di-V=nya DP または DP di-V=nya のパターンが観察されるはずである。しかし、そのような例は見つかっていない。

(12) スペイン語リオプラテンセ方言 (Jaeggli1986)

A Juan, lo vimos ayer.

A Juan him we.saw yesterday

「フアンは私達は昨日彼を見た。」

4. まとめと展望

本稿では、古典マレー語のハイブリッド型 di-受動文が接語重複を伴うことを示した。ハイブリッド型は現代マレー語には存在せず、古典マレー語におけるその存在も先行研究では報告のみにとどまる(Cumming 1991; Sato 1997)。その性質を明らかにしたのは、本研究が初めてである。

冒頭で述べたように、Baker et al. (1989) の受動文の分析のうち、接語重複が関与するという部分は、注目されてこなかった。本稿で取り上げた古典マレー語のハイブリッド型 di-受動文は、Baker

らの提案を支持する言語事実である。また、類似の構文はバリ語など系統的に近い言語にも存在する (Shibatani 2008 とその引用文献を参照)。これらの構文は接語重複であるとは分析されていない。だが、もし今後の調査によりそうであると判明すれば、これらの言語も Baker らの提案の経験的基盤となり得る。従って、技術的な実装はどのようなものであれ、受動文のうち少なくとも一部には接語重複分析が必要である。

本稿では、受動文を持つ多くの言語で存在する隠在型(2a)と oleh 型(2b)については扱わなかった。Nomoto & Kartini (2014) では、現代マレー語におけるこの2つの型と DP 型の連続性を捉えようとし、前者で音形を持った DP を伴う所に、後者では人称・数が無指定の無形代名詞 (pro) を伴うと主張した。本稿で扱った、DP 型とハイブリッド型の間関係、すなわち接語重複の有無という点での違いは、隠在型と oleh 型の間にも成り立ち、(13)のような体系を成している可能性がある。

(13) 動作主標示に基づいた受動文の類型 (網掛けは現代マレー語、太枠は英語で観察される型)

| 接語 (真の動作主項) | 接語重複なし | 接語重複あり |
|-------------|--------|---------|
| 有形 DP | DP 型 | ハイブリッド型 |
| 無形 DP | 隠在型 | oleh 型 |

この体系では、受動文動作主がレキシコンと統語部門の両方で存在する。よって、受動文の動作主項がどこかで削除され、表層では付加詞のみ存在するとするような記述・分析とは相容れない。

参考文献

- Anagnostopoulou, Elena. 予定. Clitic doubling. In Martin Everaert & Henk van Riemsdijk (eds.) *Blackwell Companion to Syntax (2nd edn.)*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Baker, Mark, Kyle Johnson & Ian Roberts. 1989. Passive arguments raised. *Linguistic Inquiry* 20: 219–251.
- Collins, Chris. 2005. A smuggling approach to the passive in English. *Syntax* 8: 81–120.
- Cumming, Susanna. 1991. *Functional Change: The Case of Malay Constituent Order*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Nomoto, Hiroki. 2016. Passives and clitic-doubling: A view from Classical Malay. The 23rd Annual Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association (AFLA)での発表論文.
- Nomoto, Hiroki & Kartini Abd. Wahab. 2014. Person restriction on passive agents in Malay: Information structure and syntax. *NUSA* 57: 31–50.
- Nomoto, Hiroki & Kartini Abd. Wahab. 2016. Tipe pasif *di-* pada teks klasik Melayu. Kongres Internasional Masyarakat Linguistik Indonesia (KIMLI) 2016 での発表論文.
- Sato, Hirobumi@Rahmat. 1997. *Analisis Nahu Wacana Bahasa Melayu Klasik berdasarkan Teks 'Hikayat Hang Tuah': Suatu Pandangan dari Sudut Linguistik Struktural-Fungsian*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Shibatani, Masayoshi. 2008. Relativization in Sasak and Sumbawa, Eastern Indonesia. *Language and Linguistics* 9: 865–916.
- Suñer, Margarita. 1998. The role of agreement in clitic-doubled constructions. *Natural Language and Linguistic Theory* 6: 391–434.